『日本洋舞史年表Ⅵ』の刊行にあたって

新国立劇場情報センターのご支援を得て、2003年から『日本洋舞史年表』の刊行を続けてまいりました。この度、1984～1985年の2年分のデータを収録した『Ⅵ』が出来ました。

この年表を作っております日本洋舞史研究会という組織は、日本の洋舞評論の大先達である江口博さんが、雑誌『現代舞踊』に95回にわたって連載した「洋舞五十年」を読むことを目的とする有志により、2000年7月7日に発足しました。当時のメンバーは、薄井憲二、金井芙三枝、國吉和子、山野博大という顔ぶれでした。他に、新国立劇場情報センターには、会場の提供をはじめいろいろとお世話になりました。

日本の洋舞の歴史も、もう100年を超えました。その歴史について書いたものとしては「洋舞五十年」の他に、日本の洋舞ジャーナリズムのさきがけである村松道弥さんの『私の舞踊史』上・中・下巻（音楽新聞社刊）があるくらいなものです。100年前から日本の洋舞関係者の目は、主に西欧に向けられていたのです。

歴史を持たない文化はありえないと申しますが、日本の洋舞を考える時に、歴史的な文献が絶対的に足りないこと、自らの歴史についての関心の薄さが気になりました。このような問題意識が、江口さんの「洋舞五十年」を読んでみようという動きにつながりました。この貴重な文献を連載した『現代舞踊』という雑誌は、日本の現代舞踊の草分けのひとりである江口隆哉さんが出していた月刊の個人研究誌でした。舞踊家の江口さんが出していた雑誌に、舞踊評論家の江口さんが書いたというわけです。晩年の江口隆哉さんの舞踊活動を全面的に補佐し、献身的に支えた金井芙三枝さんが『現代舞踊』の編集の実務を担当していました。そしてバックナンバーを提供してくれたのです。

「洋舞五十年」は掲載紙のとつぜんの廃刊という事情により、1940年あたりまで書き進められたところで惜しくも中断となりました。江口博さんが書くことができなかった、そこから先の歴史を誰かが書き継がなければいけないという思いを研究会のメンバーの誰もが持ちました。しかしこれはとんでもない大仕事になります。うかつに手を出せるようななまやさしいものではありません。そこで研究会のメンバーを新たに組み直して、歴史を書く基礎となる年表を作るところから、まず始めようということになりました。研究会に会場を提供してくれた新国立劇場の情報センターが、こんどは年表印刷の費用を負担しようと申し出てくれました。当初の予定では、5年で完成させることになっていたのですが、年を追ってデータが増えることを考慮していなかったために、今回の『Ⅵ』で1985年までたどりつくのがやっとという、想定外の結果となりました。

データをたんねんに集め、それをじっと眺めていると、先人たちが何を考え、舞踊の道に自らのかけがえのない生涯を捧げたかが見えてくるような気がします。その先人たちの心を伝えるために、なんとか20世紀をカバーするところまでやり遂げ、これまでに仕上げた分の改訂、訂正の処理などもきちんと済ませ、『20世紀日本洋

舞史年表』という形に一本化して、後の世に残したいと思っております。これまで発行いたしました『Ⅰ』から『Ⅴ』までにつき、数々の忌憚のないご意見をお寄せくださいました皆様、またデータの誤りをご指摘くださいました皆様に、心よりお礼を申し上げます。

終りに、6年に及ぶ新国立劇場情報センターのご支援に心からの「ありがとう」を申し上げます。

足掛け10年の間に、すでに96回の研究会を開催してまいりました。先人の業績を後世に残さなければいけないという、ボランティア参加の会員の熱い想いが、こんなに長期の継続を可能にしたのです。目的達成までさらに地味な奉仕活動を続けますことを、この年表の意義をお認めくださる皆様にお誓いし、『日本洋舞史年表Ⅵ』刊行のご挨拶といたします。

2009年3月
日本洋舞史研究会
稲毛　博美（舞踊家）
薄井　憲二（舞踊家、舞踊史研究）
遠藤　　豊（アート・ディレクター）
國吉　和子（舞踊評論、舞踊研究）
小林　健太（バレエ制作）
雑賀　淑子（舞踊家）
森　　龍朗（舞踊家）
山田奈々子（舞踊家）
山野　博大（舞踊評論）